

中央アジア・オアシスにおける 政治権力と隊商交易

—— 清朝征服前後のカシュガリアを事例に ——

小 沼 孝 博

はじめに

1. オアシス国家における交易と商人

1.1 隊商交易の展開

1.2 17世紀初頭のヤルカンド

1.3 遊牧国家とのリンク

2. 清による対外交易の制限

2.1 清の征服と統治

2.2 清の通商政策

2.3 対カザフ交易の禁止

3. ベグ官人と隊商交易

おわりに

は じ め に

中央アジア⁽¹⁾の歴史的な役割を論じるにあたり、ユーラシア各地を結んだ遠隔地交易に注目すべきことは、もはや多言を要すまい。オアシスとオアシスの間には、古くから交通路が発達し、そこを往来する大規模な隊商（キャラバン）

(1) 本稿で使用する「中央アジア」は、主にアフガニスタン北部、パキスタン北部、旧ソ連領五共和国（カザフスタン・ウズベキスタン・クルグズ・タジキスタン・トルクメニスタン）に中国新疆を加えた範囲（「歴史的中央アジア」〔間野・堀川2004: 13-15〕）を指す。

によって物流が確保されてきた。見方をかえれば、オアシス出身者が編成する隊商とは、砂漠や山脈によって隔てられている個々のオアシスに外部へのチャンネルを提供し、繁栄をもたらしてくれる存在にはかならず、時にオアシスに拠る政治権力の消長をも左右した。ゆえにオアシスの支配者は交通・交易を保護し、隊商を構成する商人・使者・旅人などの迎接待や身分保障に腐心した〔荒川 2010: 102-107〕。さらに、ヒトとモノの移動をとまなう彼らの活動は、経済活動としての交易にとどまらず、それぞれの地域・集団を有機的に結びつけ、知識の伝達や文化の交流を促進する媒介となってきたのである。

ところが、18-19 世紀に至り、中央アジア世界は大きな転機をむかえる。17 世紀後半以降、天山山脈北部（ジュンガリア、新疆北部）を拠点とする遊牧国家ジュンガルが中央アジア一円に勢力を伸ばしたが、1755 年（乾隆 20）に及んで中国本土に拠る清によって打倒されるに至った。さらに清はジュンガルの旧属領であり、「アルティ・シャフル」（Alti Shahr, 「六都市」を意味する）と称された天山山脈南部（カシュガリア、新疆南部）のオアシス地域を 1759 年（乾隆 24）に征服した。これによって中央アジア東半に相当するパミール以東の地域は清の支配下に置かれ、それ以西の諸地域も 19 世紀にロシアに順次併呑される結果となる。独自の地位を失った中央アジア世界は、露清両国の「辺境」として位置づけなおされていくことになった。

では、このような歴史的転機を経験していくなかで、中央アジアの隊商交易にはどのような影響が及んだのであろうか。上述の如く、隊商の往来はオアシスの支配者にとって重大な関心事であり、またそれぞれの地域や集団を結びつける役割を果たしてきた。であるならば、以上の問題の追究は、単に交易システムの推移を跡づける作業ではなく、中央アジア社会の変容を把握するための重要な研究課題たりえよう。他方、帝国権力が在地社会に既存のシステムやネットワークにいかに向き合ったのか、あるいは両者がどのような対立・共存関係にあったのかという問題は、清やロシアによる統治の実態把握において有効な視点となる。本稿では、こうした関心にもとづき、18 世紀中葉に清朝統治下に置かれたカシュガリアを考察対象として、現地のテュルク系ムスリム（現在のウイグル族に相当）による通商活動の展開を明らかにし

たい⁽²⁾。

清朝征服の前後にわたる時代（17-19世紀）の中央アジアを舞台とする隊商交易については、佐口〔1966〕がカシュガリアを含む天山南北一帯（現在の新疆地域）を中心に据えて検討し、国際交易の大動脈は海上ルートに移ったものの、内陸ルートは衰退したわけではなく、ロシア、ジュンガル、清の発展によって、むしろ活況を呈するに至ったという大枠を提示している。ただし、詳細は後述にゆずるが、佐口〔1966〕を含む従来の研究からは、カシュガリア出身の現地ムスリム商人の姿がなかなか浮かび上がってこないという問題点を指摘しうる。また、清朝統治下で成立したオアシスの政治権力（清朝大臣やベグ官人）が隊商交易にどのように関与したかについても不明瞭である。これらの点をふまえ、以下の考察においては、政治権力と交易・商人⁽³⁾の相関に留意しながら、清朝統治下においてカシュガリア出身商人の通商活動がどのような変遷をたどったのかを明らかにしたい。

なお、引用史料中における〔 〕は筆者の補足、（ ）は筆者の註釈、……は中略を意味する。

(2) 19世紀にロシア領に編入されるパミール以西の地域（ロシア領トルキスタン、西トルキスタン）の事情については、本稿の考察対象とは空間的にも時間的にも異なるが、比較の視点を提供することは可能であろう。オアシス地域ではないが、野田〔2011: 183-220; 2012〕は、ロシアの進出にともなうカザフ草原の貿易構造の変化を論じており、参考になる。

(3) 以下、本稿で考察対象とする「商人」とは、個々のオアシスの枠組みを超えて遠隔地に赴き、利益のあがる奢侈品を中心に扱うキャラバン商人を指し、オアシス域内を活動範囲として日用品を扱う商人集団は考察の対象外にある。両者の性格の相違については、荒川〔2003: 10-13〕を参照。後者のオアシス域内商人が展開する交易（バーザール交易）の実態については、19世紀後半のカシュガルを事例とした真田〔1977〕の優れた考察がある。

1. オアシス国家における交易と商人

1.1 隊商交易の展開

まずは中央アジア、特にタリム盆地周縁のカシュガリア・オアシスにおける伝統的な隊商交易について、基本的な枠組みを提示しておこう。ここで主に依拠する史料は、1602年にムガル朝の首都アーグラから明朝の首都北京をめざして出発し、ラホール、カーブル、ヤルカンドなどを經由して1605年末に肅州に到達するも、志半ばでその地に没したポルトガルのイエズス会士ベントー・デ・ゴエス (Bento de Góis, 1561?-1607) の旅の記録⁽⁴⁾である。ゴエスはムガル皇帝アクバル (r. 1556-1605) の宮廷に仕えていた人物で、本来商人ではない。しかし、ペルシア語に堪能でムスリムの習慣を熟知していたゴエスは、「アブドゥッラー・イサイー」という偽名を用い、キリスト教徒のアルメニア商人を装い、肅州までのほぼ全行程を隊商に加わって移動した⁽⁵⁾。彼の残した記録は、17世紀初頭の中央アジアにおける隊商交易の実態を伝える貴重な記録として、これまで注目を集めてきた [Wessels 1924: 1-42; 榎 1979: 41-61; 澤田 2008: 63-66 など]。先行研究の考証もふまえてゴエスの旅のおおまかな行程をまとめると、以下のようになる。

1602年10月29日 アーグラ出発

1602年12月8日 ラホール到着

1603年1-2月 ラホール出発

(4) 本稿では、ヘンリー・ユールの英訳テキスト [Yule 1866: 542-591] に依拠した。

(5) この背景には、ユーラシア各地にアルメニア人の「交易離散共同体」(Trading Diaspora) が点在し、イスラーム地域にも交易ネットワークをひろげていた事実を指摘できる。ゴエスも旅の同伴者としてラホール居住のアルメニア人であるイサック (Issac) を雇っている。アルメニア商人の通商活動は、1603年にコーカサスに遠征したサファビー朝アッバース1世 (r. 1587-1629) がイスファハーンにアルメニア人を強制移住させた後、さらなる飛躍を遂げることになる [Khatchikan 1966; Gregorian 1974; Chaudhury 2005]。

1603 年 4-5 月 (?) カール到着 [8ヶ月 (8 週間?) 滞在⁽⁶⁾]
 1603 年 5-6 月 (?) カール出発
 1603 年 11 月 ヤルカンド着 [1 年滞在]
 1604 年 11 月 14 日 ヤルカンド発
 1605 年 3-4 月 チャリシュ到着 [3ヶ月滞在]
 1605 年 6-7 月 チャリシュ出発
 1605 年 12 月末 肅州到着
 1607 年 4 月 11 日 肅州にて死去

この旅の行程について最初に指摘しておくべきは、ゴエスがアークラーから単一の隊商に加わって肅州まで赴いたわけではないことである。アークラーで加わった隊商はカールで解散し、そこでヤルカンド行きの別の隊商が編成された。それがヤルカンド到着後に解散し、新たに「カタイ」(中国=明) 行きの隊商が編成されている。またチャリシュ(カラシャフル)では、隊商の解散はなかったが、より多くの商人を集めて隊商に加えている。このことは、カールーヤルカンド間のような範囲を規模とする交易圏が中央アジア各地にいくつも形成されており、その交易圏を活動の範囲とする地域的な商人集団が存在したことを示唆している[澤田 2008: 65-66]。言い換えれば、隊商の編成・解散地点となっている上記の各都市は、並存する交易圏の結節点であり、まさに中継交易の要衝であった。

ただし、地域的な商人集団が存在する一方で、その集団に属さない人間が隊商に加わったり、各交易圏の範囲を超えて移動したりすることは当然ながら可能であった。また各地で編成と解散が繰り返されるのだから、隊商構成員の顔ぶれは多様であったはずで、特定の集団のみで編成される隊商が存在した可能性は低いといえる。ムスリムを中心に編成された隊商に「アルメニア商人」たるゴエスが参加している事実が、これらのことをよく証明していよう。

次に行程の緩慢さに注目したい。16 世紀前半の記録にもとづけば、カシュ

(6) ゴエスの旅行記ではカール滞在時間を 8ヶ月とするが、前後の行程から判断してありえない。ここでは暫定的に 8 週間の誤解と考えておく。

ガルーアクス間は 15 日、アクスーチャリシュ間は 20 日、チャリシュートルファン間は 10 日、トルファンーバルス・キョル（バルクル）間は 15 日の行程であった [TR/T: 227]。これに対してゴエスは、ヤルカンド到着から肅州到着まで 2 年以上の時間を費やしている。これは実際の移動スピードの遅さではなく、各オアシスにおける滞在時間の長さ起因する。なかでもヤルカンドでは 1 年間の足止めをくったが、その理由は以下のようなものだった。

カーブル商人のキャラバンは、この都市（ヤルカンド）をその終着点としており、カタイに向かう新たなキャラバンはここで編成される。……前回のキャラバンが編成されてすでに 12 ヶ月が過ぎたが、路が遠く危険なため、キャラバンは毎年編成されるわけではなく、多くの商人が参加の手はずを整え、それらがカタイに入ることを許された時だけである [Yule 1866: 563-564]。

ヤルカンドから中国（明）まで派遣される隊商は大がかりなものであり、頻繁に編成されるものではなかった。これは何もヤルカンドに限った事情ではない。ゴエスによれば、ラホールからヤルカンドへは、年 1 回のペース⁽⁷⁾で 500 人からなる隊商が派遣され、「お互いの便宜と盗賊の襲撃から身を守るため、彼らはともに路を進んだ」[Yule 1866: 553]。遠隔地に赴く隊商交易は年単位の冗長なペースで実施され、かつ高い危険をとまなうものだったが、反面それは 1 回の派遣で得られる利益がいかに莫大であったかを意味している。

当然、危険をなるべく回避し、安全に旅を続けるための努力と工夫がなされた。隊商の大規模化はその一つである。また地域の支配者側も、交易・商人を保護して利益を確保する必要があるため、盗賊が横行する峠道などを隊商が通過する際には護衛を派出した [Yule 1866: 555]。さらに旅を続けるにあたって効力を発揮したのが、国王などの支配者から発給された証書である。これを携帯すれば、発給者の権威が及ぶ範囲において身分が保障され、各地で施設利用や免税特権などの便宜を得られた。つとに知られる事例の一つが、玄奘三蔵

(7) 年 1 回という往復ペースは、7-8 世紀のソグド商人の事例でもみられる [吉田 2011: 11, 64]。

が高昌（トルファン）出発時に高昌王から手渡された、当時中央アジア一帯のオアシスを統属下に置いていた西突厥の^{トン・ヤブグ・カガン}統葉護可汗宛ての紹介状である。そこには玄奘に駄馬を給して西突厥の勢力範囲内を通過させてもらえるよう、支援要請がしたためられていた[『慈恩伝』巻1; 松田 1987: 83-84]。果たして玄奘がスイアープの王庭で葉護可汗に面会すると手厚いもてなしを受け、今度は可汗から国書が発給され、ガンダーラ地方まで通訳付きの安全な旅を続けた[『慈恩伝』巻2]。ゴエスも同様で、信任を得ていたアクバルから発給された^{ファルマーン}証書のおかげで、当時のムガル朝の西北端に位置したカーブルまで各種の恩恵を蒙ることができた。ところがカーブルから一歩出ると、とたんに証書は無効化し[Yule 1866: 557]、ヤルカンドまで艱難辛苦の旅が続いた。ヤルカンドに到着後、今度はカシュガリアを支配するヤルカンド・ハン国の国王ムハンマド・ハン(r. 1590-1606⁽⁸⁾)から領内東部のチャリシュまでの通行証書を受領し[Yule 1866: 566]、ムハンマド・ハンの子弟(スルタン)らが治めるハン国領内の各オアシスで手厚い迎接を受けた。

1.2 17世紀初頭のヤルカンド

続いて、ゴエスが訪れた17世紀初頭のヤルカンドを事例に、オアシスの政治権力と交易・商人との関係を具体的にみていこう。当時のヤルカンドは、チングス・カンの第二子チャガタイの後裔を国王(ハン)に戴くモゲール⁽⁹⁾人政権、すなわちヤルカンド・ハン国の首都であった。本来モゲール人は中央アジアの北部草原地帯を拠点とする遊牧民であったが、15世紀後半から16世紀前半に至り、ウズベグ、カザフ、オイラト(カルマク)などの新興の遊牧勢力によって遊牧地を次第に奪われていった。南方に移動してヤルカンドに都を定めたサイード・ハン(r. 1514-1537/38)以降、このモゲール人政権はヤルカンド・ハン国と通称される。その後もハン国はたびたび草原地帯の奪還を試みるも、

(8) ムハンマド・ハンの没年は、かつてヒジュラ暦1018年(西暦1609/10)と推測されていたが、キム・ホドン(金浩東)により修正された[Kim 2010: 63-64]。

(9) 「モゲール」(Moghūl)とは、「モンゴル」のペルシア語転化である。

ことごとく失敗し、3代目アブドゥルカーリム・ハン（r. 1559/60-1591）の時代に天山山脈以南への逼塞がほぼ確定した〔Akimushkin 1970: 237-241〕。

ヤルカンドにゴエスが滞在した1603-04年は、4代目のムハンマド・ハンの治世⁽¹⁰⁾にあたる。ムハンマド・ハンは、1594年にブハラ・ハン国（シャイバーン朝）のウズベグ勢力の侵攻に直面するも、それを辛くも撃退し、東はトルファンから西はバダフシャンまでの諸地域を統治した〔KH/A: 31〕。その中心たるヤルカンドは、ゴエスの言葉を借りれば、「商人たちの一大合流地点にして、その商品の多様さにおいても注目される貿易の中心地」〔Yule 1866: 563〕であり、前述の如く、カーブルや明との間を往来する大キャラバンが1年～数年に一度のペースで発着した。その対明交易の実施に関して、ゴエスは次のように述べている。

このキャラバン〔を率いるため〕の権限は国王によって売却され、王国の権威が道中その団長に付与される〔Yule 1866: 564〕。

すなわち、ある商人が隊商を編成して明に赴く場合、商人はそれを任意でなしえず、国王から隊商長^{カールヴァーン・バシ}の資格を買い取らねばならなかったのである。

では、その資格はどのようにして保証されたのだろうか。明の時代、陸路で肅州から入国するには、いかなる商人であれ「使者」という名目でなければ許可されなかった〔KN/A: 143; 澤田 2008: 59〕。実際にヤルカンド・ハン国の国王の使者という名目で明に入国した経験をもつムスリム老商人が、アクバルの面前で述べたことによれば、

〔明の〕辺境に到着すると、地方官によって引き留められたが、彼が所持していた書簡に捺された〔カシュガル王の〕印章を確認すると、地方官は迅速な駅伝路によって皇帝のもとに送り出した〔Yule 1866: 533〕。

とあり、隊商長としての資格は国王が発給する国書（証書）によって保証されていた。このように、明側が他国からの「貢使」（朝貢使節）とみなしていた

(10) ムハンマド・ハンの治世は、モグール人政権の遊牧国家からオアシス定住国家への変貌という点で注目すべき事象がいくつか観察される。この点については、別稿にて論じたい。

人々の多くは、使者の役目を帯びた商人に率いられたキャラバンという実態をもっていた。

この対明交易で「最も重要な商品」が玉石であった。その産地はホタン河の河床と、ヤルカンドから 20 日行程の地にある「カーニ・サンギ・カシュ」(Kān-i sang-i qash)、すなわち「玉石山⁽¹¹⁾」の二ヶ所であり、前者が品質・価値において優っていた⁽¹²⁾。このうちヤルカンド南方の「玉石山」における採掘の権利は、やはり国王によって商人に高値で売却されるものであり、その特許を取得しなければ、いかなる人物も採掘をおこない得なかった[Yule 1866: 564-565]。以上をまとめると、ヤルカンド・ハン国の対明交易に関わる隊商派遣と玉石採掘の権はともに国王の手中にあり、それらを商人に高額で売却することで利益を得ていた。隊商交易の収益とは、オアシス国家の王権を支える重要な財政基盤だったのである。

このようなオアシスにおける政治権力と商人の関係⁽¹³⁾は、国家レベルの対外交に限定されていたわけではないと思われる。やや時間を遡るが、1594 年の軍事侵攻が発生するまで、ヤルカンド・ハン国はブハラ・ハン国と良好な関係にあり、ヤルカンド・ハン国から派遣された隊商は、銀貨、織物、金製の食器皿、陶器、カシミール製ショール、香水、農産物、中国製衣類、磁器、玉石などをブハラに運んだ。また、ブハラへの数度の使者派遣と 20 通以上の書簡送付を確認でき、その書簡の発信者はハンだけではなく、地方を治めるスルタンを含んでいる[Sultonova 2010: 44; 2011: 351-353]。ブハラへ書簡を運んだ使者が隊商長であった可能性は十分にあるから、地方オアシスの支配者のもとからも、規模の大小はあれ、それぞれ隊商が派遣されていたと考えてよいで

(11) この「玉石山」は、清朝征服後に官営で玉石採掘がなされたヤルカンド西南の「密爾岱山^{ミールタイ}」に相当する。

(12) 明清期の中国内地においても、この河玉と山玉の違いは認識されていた[程 1996: 40; 華 2004: 163]。

(13) 同様の関係は、アジア海域世界の港市都市の支配者による海上交易への関与のあり方とも共通する部分をもつように思える。とりわけ、インド東岸のゴールコンダ王国の国王が出資・派遣していた「王の船」の活動[和田 2007]は比較対象として興味深い。

あろう。明確な証拠はないが、各オアシスのレベルで、政治権力が隊商交易に関わる諸権利を握る状況が普遍的に存在していたと考えられる。

1.3 遊牧国家とのリンク

以上のようなオアシス出身者の通商活動は、北方の草原地域に広域支配を展開する遊牧国家が成立し、オアシス地域がその統属下に置かれると、遊牧国家の強大な政治力を背景に飛躍的に拡大した。この問題については、すでにジューンガルを事例として論じているので [Onuma 2011], その要点だけを以下にまとめておく。

オイラト系遊牧民が連合して成立した遊牧国家ジューンガルは、1680年にヤルカンドを制圧してカシュガリア・オアシスを体制下に組み入れた。イリに移住した一部のテュルク系ムスリム商人は、ジューンガルにおいて「ベデルゲ(ン)⁽¹⁴⁾」と呼ばれ、ジューンガルの君主に直属する集団である「オトグ」の一つを組成し、遊牧国家の一角を構成していた。ジューンガルは北方では西シベリアのロシア人と、東方では戦争がなければ中国(清)と、南方ではチベットと交易をおこない、インドや西トルキスタンに赴く商人も多かったとされるが、この広範な通商圏は、ジューンガル政権の保護下にあったオアシス出身商人によって開拓され、維持されたものといえる。例えば、1680年のカシュガリア制圧以降、清に到来するジューンガルの「貢使」が増大する現象が生じたが、その代表者には明らかにムスリム名をもつ者がいる。また、「熬茶」と通称される対チベット交易[呂・張 2010; 呂 2012; 呂 2013; 多久 2014]へもムスリム商人の参加が確認できるし[『熬茶檔』1: 503, 515], ヤルカンド南方のラダックでも「ジューンガルの回子」(Ma. jun gar i hoise) からなる隊商が交易活動を展開していた[『熬茶檔』1: 568, 571]。

では、本章で論じたカシュガリア・オアシスにおける隊商交易のあり方は、清の征服と統治によってどのように変化していくのであろうか。

(14) ペルシア語で「商人」を意味する bāzārgān に由来する。

2. 清による対外交易の制限

2.1 清の征服と統治

1745 年以降、ジューンガルは継承争いを発端として衰退の一途をたどり、支配体制は動揺をきたした。この機会を逃さなかったのが長年ライバル関係にあった清であり、1755 年の遠征によってジューンガルを崩壊に追い込んだ。清は当初、ジューンガル政権のもとにあったオイラト遊牧民を体制下に編入すべく試みるも、それに失敗して離叛をまねき、1757 年にオイラトの一掃へと方針を転換した [小沼 2014]。一方、テュルク系ムスリムが居住する天山以南のオアシス地域に対しては、清は現地で政治的・宗教的権威を誇るカシュガル・ホージャ家と関係構築をめざした。しかし次第に両者の対立は深まり、清は 1759 年にカシュガリア全域を制圧した。のちに清は、この西征によって獲得した天山山脈の南北にひろがる地域（中央アジア東半）を、「新たな領域」を意味する「新疆」と呼ぶようになる。

遠征終了後、清はイリに將軍職を設置し、新疆全域を軍政下に置いた。領内各地からイリやウルムチに家族同伴の駐防兵を移住させ、支配の拠点となる軍営を建設した。カシュガリアに対しては、その統治のために主要オアシス都市に衙門を設置した。この衙門を囲む城塞は「満城」「新城」（のちに「漢城」とも）と呼ばれ、旗人（八旗の構成員）出身の大臣以下アンバンの官員、単身交代制の換防兵が駐留した。ただし、この官員・兵士の数はムスリム民衆の人口に比してわずかであり、反乱などの重大な事件が発生しない限り、清朝当局は現地社会に極力関与しなかった。ムスリム民衆の統治は、ベグと称されていた現地有力者たちを再編した官僚制度（ベグ官人制）を創設し、ベグ官人にはほぼ全面的に委ねられていた。また中国内地からの農業移民のカシュガリアへの流入を制限し、清代に「回城」「旧城」と称されたムスリムが集住する城郭都市と満城との間の自由な往来も禁じられていた。

清代新疆地域における交易の実態に関する従来の研究は、以下の三つの点に注目するものが大半を占める。第一に、中国内地商人（漢人、回民）の進出で

ある。清朝政権は内地商人のカシュガリアへの自由な通行を認めなかったが、物流確保の必要性から、「照票」を発給して彼らを管理し、永久的かつ家族同伴での定住を禁止し、現地住民との接触を極力避けるという条件をもとに、内地商人の商業活動を認めていた。しかも、この規制は時代を経るごとに弛緩をみたため、内地商人の活動は着実に定着・拡大していった〔華 1994; 1999; 2004; Millward 1998〕。第二に、コーカンド系商人⁽¹⁵⁾の活動である。彼らはフェルガナ盆地に成立したコーカンド・ハン国の出身者であり、カシュガリア・オアシスにおける活動は清朝征服の時点ですでに確認される。19世紀前半の本国の勢力伸張にともなって彼らは交易活動を拡大させ、パミール地域の国際交易を独占し、カシュガリアを経済的に浸食していく〔佐口 1963: 345-530; Newby 2005; 小沼ほか 2013〕。第三に、新疆北部におけるカザフとの絹馬貿易である。ジュンガルを滅ぼし、さらに西方のカザフ遊牧民と接触をもった清は、イリやタルバガタイで官営の管理貿易を実施し、馬などの家畜を入手したのである〔佐口 1963: 303-344; 林・王 1991: 131-430〕。

これら蓄積されてきた研究は、いずれも清朝征服後に生まれた新たなファクターに注目し、それぞれ十分な成果をあげているのだが、一方で現地オアシスに既存のファクター、すなわちカシュガリアの現地ムスリム商人の通商活動に触れるところは少ない。以下においては、三つの新たなファクターとの関連に注意しながら、清の通商政策のなかで、カシュガリアのムスリム商人の通商活動がどのような状況に置かれたのかを検討していきたい。

2.2 清の通商政策

清朝政権は征服達成後ただちに、辺境の統治と防衛の必要上から、カシュガリアの諸都市を結ぶ駅路（軍台）路を整え、さらに域外に続く交通路上の要地に^{カルン}卡倫（警備所）を設置した〔堀 1979〕。この駅路は甘粛の嘉峪関を經由し

(15) 本稿では、コーカンド、アンディジャン、マルギラン、ナマンガンなどのフェルガナ盆地オアシス出身商人を「コーカンド系商人」と呼ぶ。なお清朝史料では、^{アンディジャン}「安集延 商人」の呼称をもって、アンディジャン出身商人だけでなく、「コーカンド系商人」全体を指す場合がある。

て中国本土から延びる駅路に接続し、これを經由して内地商人がカシュガリアとの間を往来した。一方、カシュガリアのムスリムが編成する隊商が、ジュンガルの時代のように嘉峪関以東へ通商活動に赴いた形跡は、史料中にわずかに確認できる程度でしかない [Millward 1998: 159-160; 柳澤 2014]。かつて対明貿易において最重要輸出品であった玉石は、清朝当局によって採掘と取引が官営化され、玉石交易の主役は山西商人などの内地商人に移った。18世紀後半の乾隆朝において玉石の民間交易は原則禁止であったが、玉石の需要と利潤の高さは、1778年（乾隆43）に発覚した「高僕玉石案」に代表されるように、オアシス駐在の清朝官員と内地商人の結託による密輸事件をしばしば引き起こした [華 1999: 137-139; 華 2004]。

卡倫の設置は、現地住民が組織する隊商が西方（西トルキスタン方面）・南方（ラダック・カシミール方面）へ移動する際の障害となった。例えば、カシュガルから卡倫を通過（出卡）して交易に赴く場合、以下のような行政手続きが必要であった。

カシュガルの回子、アンディジャンの回子、クルグズが、カシュガルからコーカンド、アンディジャン、クルグズ諸部などの諸地域に交易に行くならば、すべて将軍や大臣が以前定めたとおりに印章を捺した出卡の証書（karun tucire temgetu bithe）を与え、卡倫に到った後、卡倫の役人が〔その隊商が〕証書のとおりかを検査し、彼らを出卡させましたが、証書を持って行かせませんでした。卡倫に〔証書を〕留めおいて、彼らが交易を終えて帰って来た後、卡倫の場所でやっこの証書を返し、〔回子はそれを〕印務処に返却したのです⁽¹⁶⁾。

まず清朝当局に申請して出卡の証書（以下「出卡執照」と呼称）を取得せねばならず、その上で卡倫通過時に身元調査を受けた。そして帰還後、商人は「出卡執照」を清朝当局に返却した。おそらく「出卡執照」は一度のみ有効であり、次回以降はそのつと取得申請をおこなう必要があったと考えられる。そもそも

(16) 『新疆匯編』87: 65, 乾隆33年1月22日 [1768/3/10], カシュガル辦事大臣イレトゥ（伊勒図）等の満文奏摺。

カ倫の外部（カ外）へ向かわなくとも、

どの都市に行っても、やはりその都市の大臣に文書を送り、
彼らが取引を終えて帰る時に、その都市の大臣らのもとより証書を与えて
から帰させます。勝手に別の都市に交易に行く回子はいません⁽¹⁷⁾。

とあるように、カシュガリア諸都市間ですら自由に交易しえたわけではなかった。清朝統治下に生きた現地商人にとって、オアシス間の移動には煩雑な手続きが必要だったのである。

また清朝政権は、征服直後、カシュガリアに到来する商人の減少に鑑み、域外の外来商人を呼び込むための優遇策を講じた。1760年初頭、カシュガリアに到来した外来商人からは商品の30分の1（当初は20分の1）を、域外で交易して帰還したカシュガリア出身商人からは20分の1（当初は10分の1）を商税として徴収すると定めた〔佐口1963: 366-367; 林・王1991: 513-514; Millward 1998: 100-101〕⁽¹⁸⁾。同年末には、コーカンド・ハン国のイルダナ・ビィ Irdana Bi からの要求を受け、域外の支配者が派遣した使臣が帯同する隊商は非課税対象とした〔Onuma *et al* 2014: 395-396〕。

以上に述べた諸点からは、清の統治政策は明らかに現地ムスリム商人の移動を制限する方向性を有しており、ジューンガルの時代に比べて、彼らは活動範囲を縮小させざるをえない状況にあったことは確実である。その一方で、中国内地を含め周辺諸地域からカシュガリアに到来する外来商人には、玉石交易への参入や商税の優遇など、カシュガリアに販路を拡大できる条件が提供された。では、現地ムスリム商人に新たな通商の機会が訪れた場合、清朝政府はどのように対応したのであろうか。以下、18世紀後半にしばしば俎上に載った対カ

(17) 『新疆匯編』67: 335-336, 乾隆29年3月13日[1764/4/13], ヤルカンド参贊大臣エルギンゲ Elgingge (額爾景額) 等の満文奏摺。

(18) 1812年にカラコルム峠を越えてヤルカンドに入ったカシミール人のミール・イゼットウッラーによれば、ヤルカンド南方の Aurtang の地に設置されていた清の税関 (custom-house) でカシミール商人から40分の1, そのほかの者から30分の1を徴収していた〔Izzet Ullah 1843: 301〕。カシミール商人の税率が低い理由は不明である。

ザフ交易を事例として考察してみたい。

2.3 対カザフ交易の禁止

16世紀以降、カザフ人はモグール人の遊牧地を奪い、カシュガリア・オアシスの政情にもしばしば容喙するようになった。ところが、17世紀後半にジュンガルが勢力を増すと、カザフに対して断続的に攻撃をしかけるようになり、カザフは西方への移動を余儀なくされる。1690年代後半にカシュガルとヤルカンドの間でカシュガル・ホージャ家のアーフアーク統とイスハーク統の対立が先鋭化した際、カザフのハーシム・スルタンがヤルカンドに招かれて一時的にハンに推戴 [TKh/D126: 20b-22a; 澤田 2015: 104-106] されて以降、しばらくカシュガリアにおけるカザフの足跡は確認できなくなる。

1745年にジュンガルが内紛状態に陥ると、カザフは東方回帰の動きを開始し、それは清のジュンガル征服とその後のオイラトの人口激減によってさらに加速した。1757年にカザフ東部の有力者であった中ジュズのアブライが清と「講和」（清側の認識では「帰順」）すると、清は1758年にウルムチで、1761年にイリで、1764年にタルバガタイでカザフとの交易を開始した [佐口 1963: 303-306]⁽¹⁹⁾。1765年にウルムチでの交易を停止し [王・林 1991: 160]、以後はイリとタルバガタイで毎年定期的な交易がおこなわれ、清はカザフから馬などの家畜を、カザフは清から絹織物や棉布を主に入手した。この清とカザフの交易は、清朝当局者の立ち会いのもとに実施される官営貿易であり、私的な取引は禁止されていた。

しかし、カザフの遊牧地拡大の動きはやまず、東では清との境界問題、南ではクルグズとの遊牧地争いが発生した [小沼 2014: 192-203, 220-224]。この流れのなか、カザフがオアシス定住民との交易を求めてカシュガリアに再び姿を現す。この問題については、すでに佐口 [1963: 308-312] が『高宗実録』の記

(19) 興味深いことに、清に征服される直前の1758年、清と対立するカシュガリアのムスリム勢力は、清軍の増強を防ぐため、カザフに清と馬を交換しないよう求めたという [MOTsA 2: 143]。

録をもとに清朝政権の対応を検討し、カザフとカシュガリア・ムスリム間の直接交易が1767年（乾隆32）までに全面的に禁止されるに至ったことを指摘している。ただし、佐口の所論には不正確な部分もあるので、現在利用が可能となっている清の公文書史料をもとに補正しつつ、以下にその経緯を述べよう。

1763年（乾隆28）、カザフ人がカシュガルやウシュに到来するようになり、連れてきた家畜と、オアシスで生産・入手できる奴隷、鉄製品、武器、絹・棉布との交換を求めた⁽²⁰⁾。現地の清朝当局は、この段階ではカザフの来訪を拒絶しておらず、むしろ交易を推奨する姿勢を示していた。例えば、当時のカシュガル参贊大臣ユングイ Yunggui（永貴）は、通商を望むアブライが派遣した使者の来訪を歓迎し、「汝らが各地に交易に行けることは、生計に非常に有益であろう」と述べ、免税での取引を認めた⁽²¹⁾。この背景には、当時のカシュガリアで家畜が慢性的に不足していたという実態があり、実際に民間における家畜購入価格は新疆北部の公定価格より高かった⁽²²⁾。

この現場の措置に清朝中央は難色を示す。その理由の一つがカザフ東漸の動きへの警戒であり、もう一つが新疆北部における家畜欠乏への危惧であった。特に後者に関しては、1760年代に入って新疆北部の軍営形成が本格化し、イリやウルムチに多数の兵丁が家族同伴で移住した〔小沼2014: 124-136〕。中国内地から隔たっているため軍事用・農耕用・食用の家畜はカザフとの取引にほとんどを依存しており、安定的かつ継続的に家畜を確保するため、清朝当局はカザフ取引における公定価格を、馬は平均で銀3-4両と、内地の半額程度に設定していた〔佐口1963: 325-326〕。このような状況をふまえ、1763年9月に乾隆帝は次のような上諭をくだした。

今後カザフがもしも再び馬畜を連れて回疆（カシュガリア）に交易しに来

(20) 『新疆匯編』62: 445-446, 乾隆28年6月4日[1763/7/14], カシュガル参贊大臣ユングイ Yunggui（永貴）等の奏摺；『新疆匯編』63: 186-188, 乾隆28年6月25日[1763/8/4], ウシュ辦事大臣スチュン Suceng（素誠）の奏摺。

(21) 『新疆匯編』63: 304-306, 乾隆28年7月5日[1763/8/13], ユングイ等の奏摺。

(22) 『新疆匯編』65: 35-37, 乾隆28年9月25日[1763/10/31], カシュガル参贊大臣ナシトゥン Nasitun（納世通）等の奏摺。

たら、回子らが取引することを厳禁し、すべての家畜をみな官買とし、必ずイリやウルムチの価格より安く買い取らせよ。少しも得をさせてはならぬ。もしも彼らが「よい価格ではないので〔家畜を〕返せ」といえば、すぐに返すように。なおも到来したカザフには、「お前たちはこれまでイリやウルムチの地で交易しており、まったく回疆に来ていなかった。我々のところでは少しも馬畜を必要としていない。しかもバダフシャン、アンディジャン、クルグズなどの地からも多く取引して家畜を得ている。もはやお前たちの馬畜は必要ない。今後お前たちが交易するなら、従来どおりイリやウルムチに行くように。ここに来ても利益はないぞ。」と告げて理解させよ。ただ彼らに得をさせないようにしさえすれば、カザフは自ずと来なくなるだろう⁽²³⁾。

すなわち、カシュガリアにおける家畜の購入価格を新疆北部よりさらに低く設定し、彼らが不利益をこうむるよう価格操作をおこなったのである。翌 1764 年 2 月に通商許可を求めてカシュガルにきたカザフのアイトゥ (Ma. Aitu) に対して、参贊大臣ナシトゥン Nasitun (納世通) は、「カシュガルに交易に来ても無益である」ことを説き、ハーキム・ベグのガダーイ・ムハンマド Gadā-yi Muḥammad に委託して既定の方針に沿って対処させている。カシュガル住民と自由に交易させず、最終的には清朝当局が「イリやウルムチの価格より安くし、馬一頭を 3 両、牛一頭を 2.5 両、羊一頭を 0.5 両」で買い取った⁽²⁴⁾。

続いて問題となったのが、オアシス出身者によるカザフとの私貿易である。1764 年、イリから出発した清の巡察部隊は、カザフと交易をして帰路にあったカシュガル在住の「アンディジャン商人」30 名、およびカザフ人護衛 3 名と遭遇した。この隊商を率いていたアンジュバイ (Ma. Anjubai) によれば、彼らはクルグズのサヤク部と交易するため前年 9 月に正式な手続きを経て出卡したが、それが不調に終わったため、カザフの遊牧地まで北上して交易をおこ

(23) 『乾隆寄信』4: 344-345, 乾隆 28 年 8 月 9 日 [1763/9/15] 条; Cf. 『高宗実録』692: 8b-9b, 乾隆 28 年 8 月壬辰 (8 日) [1763/9/14] 条。

(24) 『新疆匯編』66: 446-449, 乾隆 29 年 1 月 26 日 [1764/2/27], ナシトン等の奏摺。

なったという⁽²⁵⁾。報告を受けたカシュガルのナシトゥンは、次のように対処した。

かつて奴才^{わたくしめ}らは、カシュガルの回子がカザフの地に交易に行くことはできないと厳禁した当初、アンディジャンの回子であれ、カザフと交易に行くための証書は交付していませんでした。いまアンディジャンの回子アンジュバイらがブルト（クルグズ）の地に交易に行き、さらに利益を追求して、そこから密かにカザフ〔の地に〕行ったことは極めて非なることです。ただし、アンジュバイらは非常に畏服し、かつ外藩（tulergi aiman）⁽²⁶⁾の者なので、奴才らは公銜ハーキム・ベグのガダーイ・ムハンマドらに委ね、アンジュバイらを厳しく戒めさせました。加えて、「今後いかなる地の回子であれ、もしも密かにカザフ〔の地〕に行って交易することがあれば、必ず厳罰に処す」とガダーイ・ムハンマドに委ね、かたく禁じさせました⁽²⁷⁾。

対カザフ交易の禁令は、出身地を問わず、清朝領内で活動する商人すべてに適用されるべきものだった。ただし、清朝当局がアンジュバイらを厳罰に処さず、「厳しく戒めさせる」ととどめた点からは、「外藩の者」には一定の配慮があったことを窺える。

対カザフ交易が大きな懸案として表面化したのは、1767年初頭に交易のためイリを訪れるカザフ人の減少が報告されてからである。調査の結果、多くのカシュガル商人が密かにカザフの遊牧地に赴いて家畜を購入しているという事情が明らかになった。イリ將軍アグイ Agūi（阿桂）は、カシュガル辦事大臣チョクト Cokto（綽克托）に協力を要請しつつ、ムスリム住民がカザフの遊牧地に交易に赴くことを禁止し、それが発覚した場合はイリに身柄を送致して厳

(25) 『新疆匯編』67: 237-238, 乾隆29年2月26日[1764/3/28], ナシトゥン等の奏摺。

(26) ここでの「外藩」は、清朝皇帝から爵位を授与されたモンゴルなどの王公（＝外藩王公）ではなく、清の実効支配地域の外側に位置する国や集団を指す概念である。

(27) 註(25), 同史料, 『新疆匯編』67: 238-239。

罰に処すべきであると提案した⁽²⁸⁾。ただしチョクトからは、カザフとの直接交易は禁止すべきだが、カシュガル^{カシュガリア}の住民は農耕と交易を主な生業とし、家畜繁殖に長けていないため、コーカンドやクルグズから輸入される家畜までも禁止すれば、彼らの生活に支障をきたしかねないという意見が提出された⁽²⁹⁾。乾隆帝も、アグイの措置には行き過ぎた面があり、かつ「回子らがカザフ〔の地〕に赴くことは、カザフが回^{カシュガリア}地に続々とみだりに入り込んでくるよりましである⁽³⁰⁾」と指摘しており、その後に届いた上記のチョクトの意見の妥当性を認めた⁽³¹⁾。ところがチョクトは、上記の乾隆帝の見解を、「回子らがカザフの地に交易に行くのを禁じる必要はない」と拡大解釈した。乾隆帝はチョクトの解釈に問題があることを認識しつつも、新疆北部の購入価格を超えないという条件で、いったんはカザフとの直接交易を許可する⁽³²⁾。ところが、ここでチョクトがハーキム・ベグのガダーイ・ムハンマドとイシクアガ・ベグのトカ Toqa と協議をもったところ、彼らからカザフとの交易は不要であるという、思いもよらぬ反応が返ってきた（後述参照）⁽³³⁾。チョクトは議論を振り出しに戻し、今度は交易の解禁をしばらく見送りたいと奏請したため、乾隆帝から怒りを買った⁽³⁴⁾。紆余曲折はあったが、こうして結局は、カシュガリア・ムスリムに従来どおりクルグズとコーカンドへの通商を許し⁽³⁵⁾、カザフとの直接交易を一切禁じることが決定された⁽³⁶⁾。

(28) 『新疆匯編』 82: 303-306, 乾隆 31 年 12 月 29 日 [1767/1/29], イリ將軍アグイの奏摺。

(29) 『新疆匯編』 83: 15, 乾隆 32 年 2 月 1 日 [1767/2/28], チョクト等の奏摺。

(30) 『高宗実録』 卷 777: 13a-b, 乾隆 32 年正月己丑 (24 日) [1767/2/22] 条。

(31) 『乾隆寄信』 7: 255-259, 乾隆 32 年 3 月 4 日 [1767/4/2] 条。

(32) 『乾隆寄信』 7: 298-301, 乾隆 32 年 4 月 6 日 [1767/5/3] 条。

(33) 『新疆匯編』 84: 14-16, 乾隆 32 年 5 月 22 日 [1767/6/17]。

(34) チョクトはカシュガル辦事大臣の職を解任され、イリ領隊大臣に配置換えされた。『乾隆寄信』 7: 460-463, 乾隆 32 年 8 月 17 日 [1767/10/9] 条。

(35) これはカシュガルやウシュなど、タリム盆地西北辺に位置するオアシスを念頭においていると考えられる。盆地西南辺のヤルカンドでは、ラダック・カシミール・バダフシャンなどパミール山岳地域との通商関係が認められていた [Fewkes 2009; Brophy 2014]。

(36) 『乾隆寄信』 7: 384-387, 乾隆 32 年 6 月 27 日 [1767/7/22] 条。

この禁令の適用例を、翌 1768 年（乾隆 33）にアブライが派遣した使者ティラシ Tilash とカシュガルの清朝当局の交渉からみてみよう⁽³⁷⁾。アブライによる使者派遣の名目は、前年にカザフの遊牧地に到ったカシュガルの商人ルージー・スーフイー Rūzī Šūfī がカザフ人から家畜を購入したが、対価となるべき棉布の数量が不足していた。ルージー・スーフイーは、いったんカシュガルに戻り後日不足分を補填しに来ることを、ティラシとクルグズのアタカ 'Ätākä を保証人（Pe. kafil）に立てて約束したが、反故にされているのでティラシ自らを回収のために送った、というものだった。辦事大臣イレトゥ Iletu（伊勒圖）が、イシクアガ・ベグのトカに依頼してルージー・スーフイーを見つけ出して審問すると、おおよその事情は合致していた。ルージー・スーフイーの言い分によれば、カシュガル帰還後、「カザフに対する交易が禁止になったので、敢えてティラシに会いに行かなかった」という。イレトゥはルージー・スーフイーに不足分の棉布を支払わせるとともに、ルージー・スーフイーをバーザールで 1ヶ月間の枷刑に処した。

一方でティラシは別途多くの家畜（馬 100、羊 600、牛 10）を連れてきており、カシュガル住民との取引を望んでいた。ティラシが携帯したアブライの書簡中にも「我々に商人を送るように。さにあらずば、我々に路を与えるように。〔カシュガルに〕入って交易せん」（Bizgä saudāgır *ibärsün*.⁽³⁸⁾ Bolmasa, bizgä yol bersün. Kirip saudā qilghali.）とあり、カシュガルでの交易が使者派遣の真の目的であることは明らかであった。イレトゥはその要求を拒んだが、ティラシが哀願したため取引を許可した。ただし、それは購入価格を極めて廉価（馬 1 両、羊 0.2 両）に設定し、かつ事前に事情を説明してあるベグ官人やムスリムの商頭（Ma. hūda i da）との取引に限定したため、結局ティラシは家畜売却をあきらめた。これ以降、カザフによるカシュガリア・オアシスとの通商の要求は途

(37) 以下の考察は、「軍機処滿文録副奏摺」檔号 03-0183-2261-031、乾隆 33 年 2 月 13 日 [1768/3/30]、イレトゥ等の奏摺、およびアブライのテュルク語書簡の内容にもとづく。

(38) この部分は破損により判読できないが、前後の文脈と書簡の滿洲語訳から復元した。

絶えた⁽³⁹⁾。

本章で論じたように、清朝統治下におかれて以降、カシュガリア・オアシス出身者の通商活動には漸次制限が加えられた。したがって、彼らの国際市場を舞台とする隊商交易への参画は従来に比べて限定的になっていったと考えられる。これを示唆するかのように、カザフとの交易が禁止されるまでの期間(1763年～1767年)だけでも、密かにカザフ遊牧地とカシュガリアの間を結んだ商人の主体はコーカンド系商人であり、なかでも上述したアンジュバイのような、カシュガルに形成された「交易離散共同体」を拠点とする商人の活動が目にとまる。1767年にウシュへ到来した12隊編成の93名からなる隊商は、馬252、牛487、羊8,330という大量の家畜を率いてきた。彼らは元々コーカンド、アンディジャン、タシケント、ナマングアン出身のムスリム商人が編成した隊商で、以前より家畜を売るためにカシュガルを幾度か訪れていた。そして今回はカシュガルからクルグズやカザフの遊牧地に向かい、家畜を購入して隊商の一半はカシュガルへ戻り⁽⁴⁰⁾、もう一半がウシュに到ったのである。93名のうちコーカンド系商人は43名であり、ほかの50人はカシュガルや移動の途中で雇い入れた駄畜の世話係で、その内訳はコーカンド・アンディジャン人25名、カシュガル人20名、クルグズ人1名、カザフ人4名であった。経由地で新規参入者を募り、隊商が大規模化・混成集団化することは、伝統的な隊商交易の姿である。カシュガル人の存在を注視したウシュ辦事大臣ユンゲイは、「駄畜の世話係」という名目で商人が参入しているのではないかと疑念を抱いた。調査の結果、唯一サダトという人物がカザフとの取引によって家畜を得て

(39) 1808年、アブライの第3子アディル・スルタンがカシュガルに遣使して交易を求めたが[佐口1963: 311]、清朝当局は「乾隆年間の旧例」に照らして対処し、交易を諦めさせた。『仁宗実録』巻199: 11a-12a、嘉慶13年7月甲申(20日)[1808/9/10]条。

(40) ウシュに向かわなかった一半の別隊と思しき11隊編成の隊商がカシュガルに着している。『新疆匯編』83: 149、乾隆32年3月1日[1767/3/30]、チョクト等の奏摺。

いたが、取引が小規模であったことから不問に付された⁽⁴¹⁾。カシュガリア・オアシス出身者が国際的な隊商交易の舞台で主体性を発揮することは難しくなっていたのである。

3. ベグ官人と隊商交易

清朝征服後のカシュガリアにおける隊商交易のあり方に関して、もう一点注目しておきたいのが、オアシスの政治権力との関係である。前述したように、この時代のオアシスには二つの政治権力、すなわち清朝大臣を筆頭とする非現地人の官員や兵士と、ハーキム・ベグを筆頭とするベグ官人が併存していた。両者の権力行使の範囲を定めた明確な規定はないものの、おおまかにいえば、前者が軍政面を、後者が民政面を担当することによって、清朝治下のオアシスにおける行政は運営されていた。例えば、1807年（嘉慶12）にヤンギヒサル（軍台）の補修と農地の開墾を願い出た際、清朝当局は統治のために設置した駅には官費を捻出したが、農地開墾は「回子の職務内のこと」（*Ma. hoise sei teisu dorgi baita*）であるとしてムスリムの自弁にまかせた〔堀 2001: 108-109〕。対カザフ交易への対応からもわかるように、解決すべき懸案が生ずれば清朝当局とベグ官人はともに協力して事にあたったが、両者の間には一種の「棲み分け」ともいえる管轄範囲の違いが存在していた⁽⁴²⁾。

さて、ここで問題となるのは、清朝史料に「貿易事務」（*Ma. hūdašara baita*）として現れる交易関連の業務がどのように扱われていたかである。カザフ交易への対応からは、一見オアシス駐在の清朝大臣が積極的に関与していたかにみえる。しかし、清朝当局の対応の主な動機はカザフ遊牧民の東漸防止、新疆北

(41) 『新疆匯編』83: 8-11, 乾隆32年2月1日 [1767/2/28], ユンギイ等の奏摺。

(42) 誤解を避けるために述べておくが、この二つの権力構造をまったく別個なものとして理解するのではなく、役割分担に注意を払いつつ、一体として清代カシュガリア・オアシスの政治・社会構造の構成要素とみなすべきであるというのが、筆者の基本的な考えである。

部の軍営における家畜確保、および辺境防衛や秩序維持にあり、現地住民の経済的な商業行為自体への関心は概して希薄である⁽⁴³⁾。

これに対してハーキム・ベグを筆頭とするベグ官人は隊商交易にどのように関わっていたのであろうか。まず、対カザフ交易禁止の端緒となった1763年9月の乾隆帝の上諭がカシュガリアの現地住民に宣布されるまでの下達経路を確認してみよう。北京の軍機処で起草されたこの上諭は、ヤルカンド辦事大臣シンジュ Sinju（新柱）のもとに到達した後、複写が作成されてカシュガリア西部のカシュガル、ウシュ、アクスの大臣宛に伝送された⁽⁴⁴⁾。興味深いことに、ヤルカンド、ウシュ、アクスの三大臣は、上諭の内容を各オアシスの現地住民に宣布するにあたり、それを各都市のハーキム・ベグに委託している⁽⁴⁵⁾。カシュガルについては、大臣のユングイからガダーイ・ムハンマドへの委託を直接伝える史料を見出せない。しかし、翌1764年2月に到来したカザフのアイトゥが交易を求めた際に、ユングイの後任であるナシトゥンが「諭旨にしたがって公衙ハーキム・ベグのガダーイ・ムハンマドにきちんと伝えて〔カシュガル住民にカザフの家畜を〕買わせない⁽⁴⁶⁾」と述べている。やはり同様の経路で、事前にガダーイ・ムハンマドに指示があったと想定してよいだろう。

現地住民への禁令周知はテュルク語でなされたであろうから、むしろハーキム・ベグの介在は当然であったろうが、少なくともこの案件を通じて清朝大臣が直接、現地社会に干渉していなかった点は指摘し得る。

(43) このような清朝政権の姿勢はカシュガリアに限ったことではない。広州やキャフタにおける制限貿易のあり方からも指摘されるように、清朝政権にとっての対外貿易とは、あくまで清朝皇帝が周縁諸国・諸勢力に与えた「恩恵」の一つとして認識される側面があった。

(44) 『新疆匯編』64: 395-96, 乾隆28年9月14日[1763/10/20], ヤルカンド辦事大臣シンジュの奏摺。

(45) 『新疆匯編』64: 437-39, 乾隆28年9月22日[1763/10/28], アクス辦事大臣ハイミン Haiming（海明）の奏摺；『新疆匯編』65: 96-98, 乾隆28年10月8日[1763/11/12], スチェンの奏摺。

(46) 註(24), 同史料, 『新疆匯編』66: 448。

表 対カザフ交易禁令（1763）の下達経路

都 市	清朝大臣	ハーキム・ベグ
ヤルカンド	シンジュ（新柱）⇒	ハディー
アクス	ハイミン（海明）⇒	サティフ・アルディ
ウシュ	スチェン（素誠）⇒	アブドゥッラー（ハミ郡王）
カシュガル	ユングイ（永貴）[⇒	ガダーイ・ムハンマド]

次に注目したいのは、現地ムスリム商人が隊商を派遣するための手続きである。前述したように、清朝征服後に設置された卡倫の通過には、各オアシスの清朝大臣から「出卡執照」を取得する必要があった。ただし、「出卡執照」自体に對外交易の許可状という性質は具備していなかったと考えられる。この点に関して、1764年のアンジュバイの案件に関わる、以下のガダーイ・ムハンマドの証言は注目に値する。

カザフ〔の地〕に交易しに行ったアンジュバイら30名とは、カシュガルに住むアンディジャンのムスリム商人です。昨年6月に彼らはクルグズのサヤク部の地に交易に行くと言わしに告げました。わたくしガダーイ・ムハンマドが捺印した証書を手渡し、参贊大臣が出卡執照を与え、送り出していました⁽⁴⁷⁾。

アンジュバイは、隊商をクルグズに派遣するにあたり、「出卡執照」を取得する前に、ハーキム・ベグに交易の許可を申し出、かつ証書を取得していた。またこの案件について報告を受けたヤルカンド参贊大臣エルギンガ Elgingga（額爾景額）は、ヤルカンドでの状況について、次のように述べている。

ヤルカンドの回子で、ほかの地に交易に行く者がいれば、ハーキム・ベグのハディーのもとで、交易に行く回子の名前と人数、持って行く家畜と物品の数を調べ、明記して捺印します。〔それを〕通行証書进行处理する官員に提出して、重ねて偽りがなくきちんと調べ、奴才らに提出させて目を通し、派遣が可能ならば、交易に行く回子の名前と人数、および物品と家畜の数をすべて証書に列記して与え、交易に送り出すのです⁽⁴⁸⁾。

(47) 註(25)、同史料、『新疆匯編』67:238。

(48) 註(17)、同史料、『新疆匯編』67:335。

カシュガルと同様に、ヤルカンドにおいてもカ外への隊商派遣には、まずハーキム・ベグのもとで必要事項を登録して交易の許可をもらい、その後で清朝当局よりカ倫の通行許可を取得せねばならなかった。この二段階の手続きは、清朝大臣が辺境防衛に関わるカ倫を管轄し、ハーキム・ベグが現地民衆の「貿易事務」を管轄しているという、行政上の「棲み分け」の構図のなかで理解されるものだろう。

隊商交易にかかわる権利は、17世紀初頭のムハンマド・ハンの事例が顕著に示すように、オアシスの政治権力を支える財源⁽⁴⁹⁾となり、ゆえに支配者が掌握を希求する対象であった。ここで清朝征服後の状況を考える場合に留意すべきは、アクス以西の主要オアシスのハーキム・ベグに任命されたハディー、サティプ・アルディ、アブドゥッラー、ガダーイ・ムハンマドといった有力者が、いずれも早くから清朝政権に帰順し、カシュガリア征服にも協力した、クチャ以東のオアシス出身者であったことである。真田 [1983] が端的に述べるように、彼らは征服者たる清朝権力を背景として、任地オアシスの都市 (shahr) を基盤に新たな統治者としての地位を確保した、「非土着伯克」と呼びうる人物であった。ゆえに彼らは、「自己の権力基盤となしうる新たな地域社会を築き、確保していこうとする性格を内包」[真田 1983: 451] していた。清朝支配の最初期にみられたオアシス農村部を基盤とする「土着伯克」との対立関係は、その具体的な現れの一つであった [真田 2014]。

真田の指摘を念頭におけば、権力基盤の確立を志向する新任のハーキム・ベグの視線が、隊商交易に関わる諸権利の掌握に注がれたことは容易に想像される。残念ながら、そのプロセスは現段階で明らかにしえないが、清朝征服から5年後の1764年の時点でハーキム・ベグが商人に交易許可を与えている事実は、目的が比較的速やかに達成されたことを示唆する。しかもアンジュバイに対する交易許可状の発給からは、ハーキム・ベグが掌握をめざす対象にカシュガル在住のコーカンド系商人も含まれていたことがわかる。後年の1821年

(49) 史料の根拠は提示できないが、清代のハーキム・ベグが発給する交易許可の証書も、商人に対して売却されるものだったと想定される。

(道光元)の記録では、ハーキム・ベグがかつてよりカシュガルのコーカンド系商人を統轄する「^{フダイダ}商頭」(khudayda < Ma. hūdai da)の任命権を有していたとされるが[佐口 1963: 381], これは同じ文脈でとらえることができる。また玉石の採掘・販売に関しても、1778年に密売で逮捕された高僕が玉石に関心を寄せたきっかけは、1776年の任官時に、玉石の私掘と密売によって多大な利益を得ていたハディーの裕福な生活ぶりを目の当たりにしたからであった[華 2004: 172]。清朝政権の玉石交易に対する統制強化の背後で、ハディーは密かに自らの経済基盤の重要な一部分として権益確保に努めていたのである。総じていえば、清朝統治下のカシュガリア住民による対外通商は段階的に制限されていったが、その一方でハーキム・ベグに任命された新たなムスリム支配者が交易に関わる既存の諸権利を確保し、それをもとに自身の権力を拡張していく動きが伏在していたといえよう。

以上をふまえた場合、不可解な問題として浮かび上がるのが、1767年にいったん許可された対カザフ交易に対して、カシュガルのハーキム・ベグやイシクアガ・ベグが反対意見を表明したことである。チョクトの報告によれば、交易許可の知らせが最初に伝わった際、カシュガルの民衆は歓喜に沸いたという⁽⁵⁰⁾。これには当然誇張もあるうが、対外交易を制限されていた現地民衆にとって、カザフとの交易が待望の新たなビジネス・チャンスであったことは疑いないだろう。ではなぜ、ベグ官人は通商の拡大に反対したのだろうか。この疑問を解く上で鍵となるのが、辦事大臣のチョクトが、ガダーイ・ムハンマドと協議をもつ前に独断でくださった次のような指示である。

いま〔身分や交易品を〕検査しているコーカンドとアンディジャンの回子らにエジェン（清朝皇帝）がくだされた仁愛あふれる諭旨を通曉させ、彼らが連れてきた馬・牛・羊を官売とせず、任意で取引するようにと命じたので、コーカンドとアンディジャンの回子らはみな驚嘆して賛美し……⁽⁵¹⁾。要するに、清が定めた公定価格の撤廃とコーカンド系商人による自由取引の認

(50) 『新疆匯編』83: 151-152, 乾隆 32 年 3 月 1 日 [1767/3/30], チョクト等の奏摺。

(51) 同上, 『新疆匯編』83: 152。

可である。これに対して新疆北部の公定価格を超えてはならないという乾隆帝の命がくだり、そして初めてチョクトはガダーイ・ムハンマドらを招集し、意見を求めたのである。ガダーイ・ムハンマドらの反対意見の理由は以下のようなものであった。

回子の諸地域を平定して以降、彼らが従来どおりコーカンド、アンディジャン、バダフシャン、クルグズ諸部に自由に交易に行くことを一切禁止しておりませんので、徐々に生計は豊かになっており、かつカシュガルのあらゆる家畜の価格も次第に下がり、安くなっています。いま回子らをカザフと交易させるなら、彼らがイリやヤール（タルバガタイ）での定価と同じ価格で〔取引するよう〕回子らに厳しく戒めましょう。やはりカザフの遊牧地はカシュガルから非常に遠いのです。なおそれなりに遠いクルグズ部を通過し、連れて行く家畜を路中追い立てたり、紛失したりすることが避けられないのは、さほど大きな問題ではありません。ただし出卡した後、わたくしガダーイ・ムハンマドからの隔たりが非常に大きくなります。彼らを管理する者がいませんし、かつイリやヤールの將軍や大臣の近くにある地界でもありません⁵²⁾。

カシュガルの商人が、果たして周辺地域に「自由に交易に行く」ことができるかと実感していたかは疑わしいが、ガダーイ・ムハンマドの観点からすれば家畜の入手はすでに十分であり、自身の管理が及ばぬところで取引が展開されることを却って懸念している。彼が現状の交易体制の変更に否定的であったことは明らかであろう。当時すでにハーキム・ベグは任地オアシスの商人集団や通商ネットワークの掌握を進めていたと考えられ、コーカンド系商人もその対象に含まれていた。その現状において、自身の目の行き届かないところで商人たちが自由に交易を展開できる余地が生まれることは、民衆一般には歓迎されるものだったかもしれないが、ハーキム・ベグらの目には、せっかく確保した経済的な基盤にほころびを生じさせかねないものとして映ったのではないだろうか。

52) 註(33)、同史料、『新疆匯編』84:15。

椿園七十一の『西域聞見録』が伝える、カシュガリアの現地ムスリム住民が「彼ら（アンディジャンやカシミールの商人）の去ってしまうのを恐れている。彼らが去ってしまえば、その地の貨財は流通なくなり、回人はおおいに不便する」〔『聞見録』巻3、安集延条〕という1775年（乾隆40）前後の状況⁵³からは、カシュガリアでの外来商人の通商活動の拡大を察知できるが、物資入手における彼らへの依存度の高さは、裏を返せば、現地商人の外部へのチャンネルが狭められてしまったことを意味する。その一方で『西域聞見録』は、1776年にシグナン地方のシャー・ワンジー Shāh Wanjī の支配領域に赴いた「鄂対の貿易回子」^{ハディー}が当地域で拘束された事件を伝えている〔『聞見録』巻3、沙関記条〕。この「鄂対の貿易回子」とは、ハディーがパトロンとなって派遣した隊商と解釈してよいであろう。すなわち、外部へのチャンネル自体は狭められていったが、ハーキム・ベグはそれを自らの管理下に置き、したたかに通商活動を差配していたと考えられるのである。新たな支配者となって間もない彼らが目ざしたのは、任地オアシスにおける交易のむやみな開放・拡大ではなく、交易に関わる権利の集約であった。この意味において、清の対外貿易の制限はハーキム・ベグにとってむしろ都合のよいものだったのである。

お わ り に

本稿では、政治権力と交易・商人の関係に注目しながら、カシュガリア・オアシスにおける通商活動のあり方を把握し、それが清朝統治下においてどのような推移をたどったのかを検討した。本稿で論じた点をまとめると以下になる。

ヤルカンド・ハン国の首都として、そして隊商交易の中継地点として栄えたヤルカンドでは、遠隔地へ赴く大規模な隊商が年単位のペースで編成・派遣された。その隊商派遣の権利や対明貿易の最重要商品である玉石採掘の権利は、

⁵³ 七十一（椿園は字^{あざな}）は、1773年（乾隆38）から1778年（乾隆43）までクチャに派遣され、印務処主事などの職にあった〔Mosca 2015〕。

国王によって商人に売却されるものだった。隊商交易の利益はオアシスの政治権力と密接に結びついており、その重要な経済的基盤となっていたのである。さらに、超域支配を展開する遊牧国家の強大な権力とリンクすると、オアシス出身商人の通商活動は飛躍的な発展をみた。

ところが18世紀中葉に清に征服され、カシュガリアの地政学的位置が清朝領域の辺境へと変化すると、清による対外交易の制限政策によって現地出身のテュルク系ムスリム商人の国際的な隊商交易は次第に不振となっていく。交易路上に人の出入を監視する卡倫が設置され、その通過には清朝当局からの許可（出卡執照の取得）が必要になった。また清は新疆北部におけるカザフとの官営貿易で家畜を安定的に入手するため、カザフとカシュガリアの住民との直接交易を禁じた。ジュンガルとは異なり、清朝政権には隊商交易という現地既存の「資源」を積極的に運用して利益を上げるという経営戦略は欠如しており、商人の自由な移動と通商活動に対する制限は時を経るごとに強まっていった。

ただし、清朝当局による対外交易の制限は主に辺境防衛や秩序維持の観点からの制限であった。対外交易を制限していくプロセスを細かに追っていくと、そこには別の側面もみえてくる。すなわち、清のカシュガリア征服に協力することで地位を上昇させ、ハーキム・ベグなどの上級ベグ官人に任命されたムスリム有力者が、任地オアシスの交易に関わる利権を手中に収めていったという側面である。商人が卡倫の外側で通商活動を展開するには、まずハーキム・ベグから隊商派遣の許可を得る必要があり、その後で清朝大臣による出卡執照の発給がなされた。清による制限貿易への志向は、当初は任地オアシスに確固とした権力基盤をもたなかったハーキム・ベグらにとって、隊商交易に関わる諸権利を自らの掌中に集約させるという“うまみ”をもっていたと考えられる。

このような清朝征服当初のカシュガリア・オアシスにおける現地商人の実態やハーキム・ベグの動きは、本稿冒頭にも述べたように、なかなか明確に把握することが難しい。本稿では利用が可能になった清朝公文書を活用したが、それでも推論を重ねた部分がある。その理由は、繰り返しになるが、オアシスにおける「貿易事務」への清朝当局の関与が間接的だったからであり、ゆえに清

朝大臣から中央に送付される奏摺に反映しにくい内容になっていたと考えられる⁽⁵⁴⁾。翻っていえば、少なくとも 18 世紀後半のカシュガリア・オアシス社会には、ベグ官人が独自に権力を行使する政治空間が形成・担保されており、「貿易事務」もその一角を占めていたといえよう。

ただし、全体としてカシュガリア出身商人の対外的な通商活動が下火になっていった状況に変わりはない。1780 年代中盤以降、パミール以西の地で成長したカシュガル・ホージャ家のサリムサクの活動がにわかに活発になり、清朝当局は警戒を強めた。おそらくその対応策の一つと思われるが、1794 年（乾隆 59）に「回民出卡貿易章程⁽⁵⁵⁾」（全 9 条）を制定し、カシュガリア出身者が出卡してクルグズと交易することにも新たに制限を加えた。カシュガリア出身商人の国際市場からの撤退は 19 世紀前半のコーカンド系商人の著しい発展の呼び水となり、その過程でカシュガルのハーキム・ベグが握っていた「フダイダ」の任命権もコーカンド本国の支配者に奪われてしまうのである。

文献一覧

史料

- Kh/A : O. F. Akimushkin, *Shāh Maḥmūd ibn Mīrzā Fādīl Churās, Khronika*, Moskva : Izdatel'stvo "Nauka" glavnaia redaktsiia vostochnoi literatury, 1976.
- KH/A : Iraj Afshar (ed.), *Khitāy-namih : A Persian Text Describing a Voyage to China by Ali Akbar Khitāi in 1516-1517*, Tīhrān : Markaz-i Asnād-i Farhangī-i Āsiyā, 1979.
- MOTsA : *Mezhdunarodnye otnosheniia v Tsentral'noi Azii, XVII-XVIII vv. : dokumenty i materialy*, k. 1-2, Moskva : "Nauka" glavnaia redaktsiia vostochnoi literatury, 1989.
- TKh/D126 : Muḥammad Ṣādiq Kāshgharī, *Tadhkira-yi khwājagān*, Sankt-Peterburgskii filial Instituta Vostokovedeniya Rossiiskoi Akademii nauk, D126.
- TR/T : *Mirza Haydar Dughlat's Tarikh-i-Rashidi : A History of the Khans of Moghulistan*, English Translation & Annotation by W. M. Thackston, Cambridge,

(54) 原則として、ハーキム・ベグは清朝中央に対する上奏の権限をもっていない。

(55) 『新疆匯編』202: 41-50, 乾隆 59 年 10 月 6 日 [1794/10/29], ユンボー等の奏摺；『高宗実録』1464: 1a-3a, 乾隆 59 年 11 月乙酉（1 日）[1794/11/23] 条。

MA: Harvard University, 1996.

『熬茶檔』1-2: 中国第一歴史檔案館編『清代軍機處滿文熬茶檔』上下, 上海: 上海古籍出版社, 2010.

『高宗實錄』: 慶桂等奉勅纂輯『大清高宗純皇帝實錄』1500卷, 嘉慶12[1807]→30冊, 台北: 華文書局, 1964.

「軍機處滿文錄副奏摺」, 中国第一歴史檔案館所蔵.

『乾隆寄信』: 中国第一歴史檔案館編『乾隆朝滿文寄信檔訊編』24冊, 長沙: 岳麓書社, 2011.

『仁宗實錄』: 曹振鏞等奉勅纂輯『大清仁宗睿皇帝實錄』356卷, 道光4[1824]→8冊, 台北: 華文書局, 1964.

『新疆匯編』: 中国辺疆史地研究中心・中国第一歴史檔案館合編『清代新疆滿文檔案匯編』283冊, 桂林: 広西師範大学出版社, 2012.

『聞見錄』: 椿園七十一『西域聞見錄』8卷, 乾隆42[1777]→2冊, 上海: 古籍書店, 刊行年不明.

『慈恩伝』: 慧立・彦惊『大慈恩寺三蔵法師伝』10卷, 垂拱4[688]→[孫・謝2000: 1-233].

参考文献

- 荒川 2003: 荒川正晴『オアシス国家とキャラバン交易』山川出版社, 2003.
- 荒川 2010: 荒川正晴『ユーラシアの交通・交易と唐帝国』名古屋大学出版会, 2010.
- 程 1996: 程越「古代和田玉向内地輸入綜略」『西域研究』3 (1996): 36-42.
- 榎 1979: 榎一雄『シルクロードの歴史から』研文出版, 1979.
- 堀 1979: 堀直「清代回疆の交通事情——軍台と卡倫を中心として——」『大手前女子大学論集』13: 95-107, 1979.
- 堀 2001: 堀直「回疆社会経済史研究とマンジュ語史料——佐口透氏所蔵の一文書の紹介——」『滿族史研究通信』10: 82-109, 2001.
- 華 1994: 華立「乾嘉時期新疆南八城内地商民」, 馬大正等編『西域考察与研究』, 373-390, 烏魯木齊: 新疆人民出版社, 1994.
- 華 1999: 華立「清代の天山南路に進出する内地商民——人口移動と辺疆地域との視点から——」『地域と社会』2: 123-144, 1999.
- 華 2004: 華立「清代の玉石交易と新疆社会」, 瀧澤秀樹編著『東アジアの国家と社会——歴史と現在——』, 161-205, 東京: 御茶の水書房, 2004.
- 林・王 1991: 林永匡・王熹『清代西北民族貿易史』北京: 中央民族学院出版社, 1991.
- 呂 2012: 呂文利「乾隆八年蒙古準噶爾部進藏熬茶始末」『明清論叢』12: 269-281, 北京: 故宮出版社.

- 呂 2013: 呂文利「乾隆十二年準噶爾入藏熬茶始末」『西部蒙古論壇』2 (2013): 3-15.
- 呂・張 2010: 呂文利・張蕊「乾隆年間蒙古準噶爾部第一次進藏熬茶考」『內蒙古師範大學學報』(哲學社會科學版) 39 (4): 39-48; 59, 2010.
- 間野・堀川 2004: 間野英二・堀川徹『中央アジアの歴史・社会・文化』放送大学教育振興会, 2004.
- 松田 1987: 松田壽男「東西文化の交流」『松田壽男著作集 3』, 7-211, 六興出版, 1987 ([初版] 至文堂, 1962).
- 野田 2011: 野田仁『露清帝国とカザフ=ハン国』東京大学出版会, 2011.
- 小沼 2014: 小沼孝博『清と中央アジア草原——遊牧民の世界から帝国の辺境へ——』東京大学出版会, 2014.
- 小沼ほか 2013: 小沼孝博・新免康・河原弥生「国立故宮博物院所蔵 1848 年コーカンド文書再考」『東北学院大學論集 歴史と文化』49: 1-24, 2013.
- 佐口 1963: 佐口透『18-19 世紀東トルキスタン社会史研究』吉川弘文館, 1963.
- 佐口 1966: 佐口透『ロシアとアジア草原』吉川弘文館, 1966.
- 真田 1977: 真田安「オアシス・バーザールの静態研究——19 世紀後半カシュガリアの場合——」『中央大学大学院研究年報』6: 207-220, 1977.
- 真田 1983: 真田安「創設期清伯克制からみたカシュガリア・オアシス社会」, 護雅夫編『内陸アジア・西アジアの社会と文化』, 437-458, 東京: 山川出版社, 1983.
- 真田 2014: 真田安「乾隆 25 年カシュガル反乱——中央アジア・オアシス社会の権力構造の究明にむけて——」『中央大学アジア史研究』38: 1-37, 2014.
- 澤田 2008: 澤田稔「一六世紀前後の中央アジアにおける通商ネットワーク」, 濱下武志監修, 川村朋貴・小林功・中井精一編『海域世界のネットワークと重層性』, 55-67, 桂書房, 2008.
- 澤田 2015: 澤田稔「『タズキラ・イ・ホージャガン』日本語訳注(2)」『富山大学人文学部紀要』62: 89-118, 2015.
- 孫・謝 2000: 慧立・彦惊著; 孫毓棠・謝方点校, 道宣著; 范祥雍点校『大慈恩寺三藏法師伝・釈迦方誌』北京: 中華書局, 2000.
- 多久 2014: 多久孝一郎「第一次熬茶使節と清朝・ジュン=ガル講和——乾隆 6 年における熬茶使節中途帰還への清朝の対応を中心に——」『社会文化史学』57: 1-30, 2014.
- 和田 2007: 和田郁子「インド・ゴールコンダ王国における君主と港市・海上交易の関係——スルターン・アブドゥッラー (1626-72) の治世を中心に——」『東洋史研究』66(1): 1-27, 2007.
- 柳澤 2014: 柳澤明「キャフタにおける清朝の「官營隊商」について——“bederge 回子”の活動——」『史滴』36: 26-47, 2014.
- 吉田 2011: 吉田豊「ソグド人とソグドの歴史」, 曾布川寛・吉田豊編『ソグド人の

- 美術と言語』, 83-100, 臨川書店, 2011.
- Akimushkin 1970 : O. F. Akimushkin, “K voprosu o vneshnepoliticheskikh svyazakh mogol'skogo gosudarstva s uzbekami i kazakhami v 30-kh godakh XVI v. – 60-kh godakh XVII v.,” *Palestinskii sbornik*, 21 (4) : 233-240, 1970.
- Brophy 2014 : “High Asia and the High Qing : A Selection of Persian Letters from the Beijing Archives,” in Alireza Korangy, Daniel J. Sheffield (eds.), *No Tapping around Philology : A Festschrift in Honor of Wheeler McIntosh Thackston Jr.'s 70th Birthday*, 325-367, Wiesbaden : Harrassowitz Verlag, 2014.
- Chaudhury 2005 : Sushil Chaudhury, “Trading Networks in a Traditional Diaspora : Armenian in India, c. 1600-1800,” in Ina Baghdiantz McCabe, Gelina Harlaftis, and Ioanna Pepelase Minoglou (eds.), *Diaspora Entrepreneurial Networks : Four Centuries of History*, 51-72, Oxford : Berg, 2005.
- Fewkes 2009 : Jacqueline Fewkes, *Trade and Contemporary Society along the Silk Road : An Ethno-history of Ladakh*, Abingdon ; New York : Routledge, 2009.
- Gregorian 1974 : Vartan Gregorian, “Minorities of Isfahan : The Armenian Community of Isfahan 1587-1722,” *Iranian Studies*, 7 (3/4) : 652-680, 1974.
- Izzet Ullah 1843 : Mir Izzet Ullah, “Travels beyond the Himaraya, by Mir Izzet Ullah. Republished from the Calcutta Oriental Quarterly Magazine, 1825,” *Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland*, 7 (2) : 283-342, 1843.
- Khatchikan 1966 : Levon Khatchikan, “The Ledger of the Merchant Hovhannes Joughayetsi,” *Journal of the Asiatic Society of Bengal*, 4th series, 8 (3) : 153-186, 1966.
- Kim 2010 : Kim Hodong, “Eastern Turki Decrees of the 17th Century in the Jarring Collection,” in James A. Millward, Shinmen Yasushi, and Sugawara Jun (eds.), *Studies on Xinjiang Historical Sources in 17-20th Centuries*, 59-119, Tokyo : The Toyo Bunko.
- Millward 1998 : James Millward, *Beyond the Pass, Economy, Ethnicity, and Empire in Qing Central Asia, 1759-1864*, Stanford : Stanford University Press, 1998.
- Mosca 2015 : Matthew Mosca (conference paper), “Cisii's Writings and Their Context : An Unofficial Source among Networks of Officials,” International Conference on “Xinjiang in the context of Central Eurasian transformations,” Tokyo : Toyo Bunko and the University of Tokyo, December 18-19, 2015.
- Newby 2005 : Laura Newby, *The Empire and the Khanate : A Political History of Qing Relations with Khoqand C 1760-1860*, Leiden ; Boston : Brill, 2005.
- Noda 2012 : Noda Jin, “Russo-Chinese Trade through Central Asia : Regulations and Reality,” in Uyama Tomohiko (ed.), *Asiatic Russia : Imperial Power in Regional and International Contexts*, 153-173, London and New York : Routledge, 2012.

- Onuma 2011 : Onuma Takahiro, “The Development of the Junghars and the Role of Bukharan Merchants,” *Journal of Central Eurasian Studies*, 2 : 83–100, Seoul : Seoul National University, 2011.
- Onuma *et al* 2014 : Onuma Takahiro, Kawahara Yayoi, and Shioya Akifumi, “An Encounter between the Qing Dynasty and Khoqand in 1759–1760 : Central Asia in the Mid-Eighteenth Century,” *Frontiers of History in China*, 9(3) : 384–408, 2014.
- Sultonova 2010 : Gulchekhra Sultonova, “Trade Relation between Bukhara and Yarkend Khanates in the 16–Earlier 17 Centuries,” *Bulletin of IICAS*, 11 : 40–48, 2010.
- Sultonova 2011 : Gulchekhra Sultonova, “The Dynamics of Interrelations Bukhara and Yarkand Khanates: Inter and External Factors,” in Komatsu Hisao, Sahin Karasar, Timur Dadabaev, and Guljanat Kurmangalieva Ercilasun (eds.), *Central Eurasian Studies : Past, Present and Future*, 351–357, Istanbul : Maltepe University, 2011.
- Wessels 1924 : Cornelius Wessels, *Early Jesuit Travellers in Central Asia, 1603–1721*, The Hague : Martinus Nijhoff, 1924.
- Yule 1866 : Henry Yule, *Cathay and the Way Thither : Being a Collection of Medieval Notices of China*, 2, London : the Hakluyt Society, 1866.

[付記] 本稿は科学研究費補助金（25770259）の助成を受けたものである。

Japan's support with the people of the former Koguryo. After suppression of the resistance by the people of the former Koguryo to Tang, Koguryo envoys were dispatched under the escort of Silla missions on the pretext of requesting support for So Koguryo 小高句麗, which had been revived in Silla, in order to prevent Japan from cooperating with Tang. The Silla missions disguised themselves as missions from Imna 任那, which had previously maintained good relations with Japan, in order to gain an advantage in diplomacy with Japan. After the downfall of Koguryo, Silla used the people of the former Koguryo instead of the Imna mission in order to build good relations with Japan. The activities of the people of the former Koguryo were closely related to Silla, Tang and Japan in the late 7th century. Here we can see the meaning of the activities of the people of the former Koguryo in East Asian history.

POLITICAL POWER AND CARAVAN MERCHANTS IN CENTRAL ASIA AROUND THE TIME OF THE QING CONQUEST : A CASE OF THE KASHGARIA OASIS TOWNS

ONUMA Takahiro

This paper examines the interactions between political power and local merchants, traces the traditional systems of the caravan trade in Kashgaria oasis towns to the south of the Tianshan Mountains (southern Xinjiang), and investigates how these changed after the Qing conquest.

In the 16th and 17th centuries, Yarkand flourished as the capital of Yarkand Khanate and as a hub of trade, from which large-scale caravans that journeyed towards Ming China were dispatched about once a year. The rights and certifications for sending caravans were sold by the Yarkand khan to the caravan leader. The khan also charged a large sum for the rights for mining jade, which was the most important product traded with Ming China. In short, profits from caravan trade were directly connected to the revenue of political power established at oasis towns in Central Asia.

After the Kashgaria region was conquered by the Qing dynasty in 1759 and became a new northwestern frontier of the Qing, Kashgarian Muslim merchants faded from the international trade scene of over time due to trade restrictions imposed by the Qing. The Qing set up a series of *karun* (check points) along the

route to monitor traffic. To pass through a *karun*, the merchant needed permission from the Qing authorities. After the Qing established a government-managed trade relationship with the Kazakhs in northern Xinjiang, they prohibited direct trade between the Kazakhs and the Kashgarian Muslims to ensure their own monopoly over the market. The Qing government did not have a management strategy to make active use of the Kashgarian merchants.

However, the Qing imposed restrictions on external trade in Kashgaria primarily to maintain frontier order. Closely tracing the process, the Muslim chieftains, who cooperated in the Qing's conquest and held the position of *ḥākim beg*, acquired vested rights to trade. For dispatching caravans, it was first necessary to seek permission to form and dispatch caravans from the *ḥākim beg*. The control over the local merchants and their trade and at the oasis level was managed not by the Qing *amban* but by the *ḥākim beg*. The Qing's intention to limit caravan trade enabled the new Muslim chieftains to hold the rights to trade. At least until the end of the 18th century, the "trading management" was ensured to them as a space that the Qing authorities did not directly engage in.